

「天国の本屋」

情報工学科三年 井下 智加

私は将来何をしたいのか。どのような仕事に就き、どのようなことを考え、どのように生きたいのか。ここ最近、見えなくなってきた。考えれば考えるほど、曖昧になっていく。最後には「どうしてこの学校にいるんだろう」という問いかけが残る。

「天国の本屋」は、生きがいがない「さとし」の物語。ある日、不思議なおじさんに誘われ、天国の本屋でアルバイトをすることとなる。この店の売り物である朗読サービスを担当し、自分に合う仕事は「本屋で働くこと」だと知る。

なぜ私がこの学校にいるのか。小学校のときからパソコンをさわることが好きだった。中学校二年のとき親がパソコンを買ってきてから、ほとんど毎日のように使っていた。中三の時にはホームページを作って、自分で書いた小説を載せたりした。そういう中で「ウェブデザイナー」になりたいという夢が生まれた。高校卒業後は就職するとしか考えていなかったこともあり、この学校を受験した。夢や目標がはっきりしていたあの時。毎日がとても充実していると思えた。

「なんかオレ、すごく生きてるって感じがする。」天国の本屋で 働きながら、ある日さとしはそう思った。皆に朗読を求められる - 誰かに何かを求められることが嬉しかった。しかし、そんな朗読を聞こうとしない人がいた。本屋のレジ店員である「ユイ」。そんなユイにさとしは恋心を抱く。ユイは心に深い傷を負い、心を閉ざしていた。その傷が癒えた時、彼女は現世に戻される。天国での記憶を全て消去して。叶わない恋だと知ったさとしはユイの心が癒える様、自分に出来ることをしようと決める。

誰かに求められるさとしが、誰かのために行動しようとする。生きがいを見つけて、前向きに物事を考えることが出来るようになったからだろう。大切な人を見つけられたからだろう。大切な人がいると積極的になれるかどうかかわからないが、何気なく過ごしてきた毎日を大切にしたいと思えるようになるのではないだろうか。一緒にいることができる時間が限られているのなら尚更・・・。

今までの学校生活の中でクラス替えほど憂鬱なものはなかった。クラス替えの度、今まで一緒だった友達と離れる。自分から話しかけることをしなかった私は、すぐに友達を作ることができなかった。そんな毎日は重々しかった。楽しくもなんともなかった。けれど、ゆっくりではあるが、友達ができて、休み時間の度に外で遊んだりするようになった時、毎日が楽しかった。「大切な人が出来ると、大切にできる時間が増える」ということを知っ

た。

「きっと、君を見つけてみせる」ユイが現世に帰る日、消え行く後ろ姿に言ったさとの言葉。はっきりと私の頭にもこだました。そしてその言葉の通り、さとしはユイを見つけることができた。辿り着くまでに長い時間がかかったけれど。

どのように行動し、継続していくのか。それが夢や願いを叶えるための、一番近い方法なのだと思った。

私は将来何をしたいのか。どのように生きていきたいのか。全然見つからないけれど、この本を読む前と読んだ後の私は、何かが変わっているのだろう。